

主題研究

特殊学級における 自閉症児への指導の在り方に関する研究 - 認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る 手だての構築をとおして - （第1報）

特別支援教育室 菊池 義仁

研究の概要

この研究は、自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る手だての構築をとおして、特殊学級における自閉症児への指導の充実に役立てようとするものである。

本年度は2年次研究の初年度として、県内の小・中学校の特殊学級（知的・情緒）全担任を対象に実態調査を実施し、自閉症児への指導の現状と課題について、分析と考察を行った。

その結果、一人一人の認知特性と発達段階の把握の仕方や一人一人の実態に応じた指導内容・方法の見直し方などに、指導上の困難さを感じていることが明らかになった。この調査結果を踏まえ、認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る手だての構築に向けて、その方向性を提示することができた。

キーワード：自閉症 特殊学級 指導の最適化 認知特性 発達段階 指導の見直し

研究の目的

特殊教育においては、個別の指導計画の作成とそれに基づく指導の充実が求められている。これは、一人一人の教育的ニーズに応じた教育の展開の必要性とその基となる障害理解という専門性が求められていることにほかならない。特に、対応の難しい自閉症児については、自閉症の理解を基に、一人一人の認知特性と発達段階に応じた指導を行っていくことが大切である。

しかし、特殊学級担任の多くは、自閉症に関する知識や指導方法が十分理解されていないため、その対応に苦慮している現状が見られる。また、知的障害児への指導内容・方法がそのまま自閉症児に用いられるなど、一人一人に応じた適切な指導が行われているとは言い難い。これは、自閉症児への指導経験の有無のみならず、認知特性と発達段階に視点を当てた児童生徒の変容の把握と随時的・連続的な指導の振り返りが少ないことによるものと思われる。

このような状況を改善していくためには、自閉症の理解を基に、一人一人の認知特性と発達段階を把握した上で適切な指導を行うことが大切であり、そのためには、自閉症児に対する理解や指導内容・方法の見直しに結び付く手だてを身に付けていく必要がある。

そこで、この研究では、小・中学校の特殊学級において、自閉症児一人一人の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る手だてを構築し、実践をとおして、障害に応じた指導の充実に役立てようとするものである。

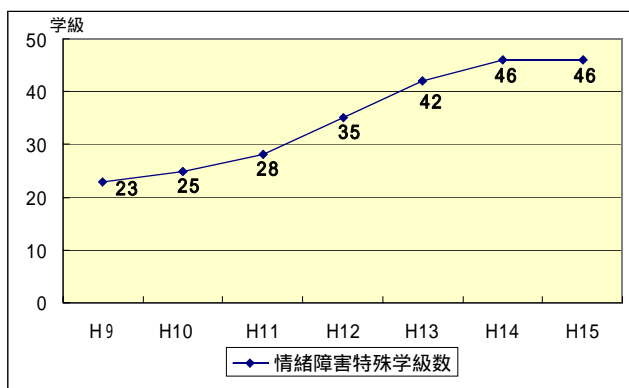
研究結果の分析と考察

1 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化に関する基本的な考え方

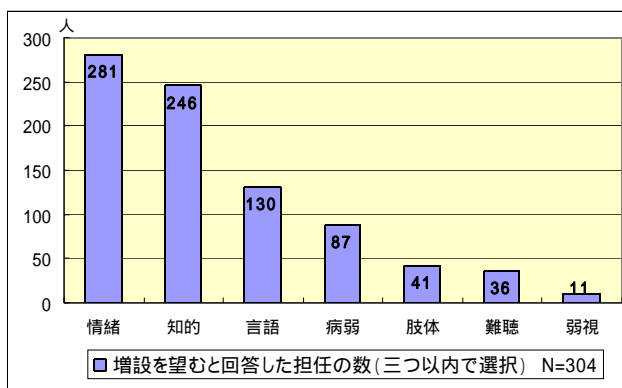
(1) 自閉症児への指導に関する今日的動向からのとらえ

自閉症児への教育的対応に関して、国レベルでは、21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議から報告された「21世紀の特殊教育の在り方について(最終報告)」(平成13年1月)さらには、特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議から報告された「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」(平成15年3月)においても、自閉症児への指導の充実を改めて取り上げ、これまで以上に障害の特性に考慮した効果的な指導についての研究や研修の必要性を提言している。

本県においては、【図1】に示すように、情緒障害特殊学級の数が増加する傾向にあり、平成9年度と今年度を比較すると2倍の増加であることが分かった。また、【図2】に示すように、平成14年度に県教育委員会が実施したニーズ調査によれば、特殊学級担任の多くが情緒障害特殊学級の更なる増設を望んでいることが分かった。情緒障害特殊学級は自閉症児のみを対象とする学級ではないものの、本県のこの現状からも、自閉症児への指導に当たる担任にはより専門的な指導が求められていることが明らかになった。



【図1】 岩手県的情绪障害特殊学級数の推移



【図2】 特殊学級担任が増設を望む特殊学級

(2) 特殊学級における自閉症児への指導の在り方に関する研究の意義

自閉症児への指導の充実が改めて取り上げられている背景には、これまでの研究や実践の成果にもかかわらず、障害の特性を配慮した専門的な指導と言える状態に、依然として至っていない実態があるものと考えた。したがって、特殊学級担任が抱えている指導上の課題等を分析・考察し、自閉症児へのより適切な指導の在り方を追究していくことは、意義があることと考えた。

(3) 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化に関する基本的な考え方

ア 自閉症児の認知特性に応じた指導とは

認知特性とは情報の入力やその処理に関する特徴である。自閉症児の認知特性の主なものとしては、「視覚優位」、「刺激の過剰選択性」、「般化の困難性」、「因果関係の理解の困難性」などがあげられ、自閉症児の行動に深く関与しているものとして重要視されている。

自閉症児のこれらの認知面の得手・不得手をできるだけ正確に理解して指導に当たることは、自閉症児への指導のすべての事項にかかわる指導の基盤であり、自閉症児への分かりやすさの提供であると考えた。そのため、児童生徒の目に留まる条件を備えた教材であるか、指導の意図が伝わりやすい手段であるかといった、主に指導方法の設定とのかかわりが重要となると考えた。

イ 自閉症児の発達段階に応じた指導とは

自閉症児を含め子どもは発達の存在であり、年齢的発達に伴って段階的に発達していく。また、障害のない部分の発達によって、障害のある部分の発達が補われていくものであり、発達の仕方は一人一人異なってくる。

一人一人の発達段階を把握し、その段階にふさわしい指導を講じることは、自閉症児に新たな力を育てるという指導のねらいそのものであり、児童生徒にどのような力を付け、どのような経験を積ませるかといった、主に指導内容の設定とのかかわりが重要となるものと考えた。また、指導内容の設定に関しては、現時点の発達の状態や年齢に配慮し、段階的に設定していくことが重要であると考えた。

ウ 特殊学級における自閉症児への指導の最適化とは

指導の最適化とは、児童生徒一人一人に応じて計画的に図っていくものであるととらえ、前述の認知特性と発達段階に応じた指導についての考え方を基に、自閉症児への指導の最適化に関する基本的な考え方を次のようにおさえた。

特殊学級における自閉症児への指導の最適化とは、自閉症児への指導全般に関する基本的な四つの指導の過程（実態把握、計画、実践、評価）において、主に指導方法の設定にかかわる自閉症の認知特性と、主に指導内容の設定にかかわる一人一人の発達段階に視点を当てて、適切かつ計画的に指導の見直しを図ることである。

2 特殊学級における自閉症児への指導に関する実態調査とその分析・考察

(1) 調査の概要

特殊学級における自閉症児への指導の在り方に関する資料を得るため、指導の現状について、県内の小・中学校すべての特殊学級（知的・情緒）担任298名を対象に、質問紙法により調査を実施した。調査の内容は【表1】に示すとおりである。

【表1】 調査紙の質問内容

問1	自閉症児の在籍の有無
問2	普段から重視している指導上の手だてや配慮
問3	指導内容・方法の設定の仕方
問4	指導内容・方法の設定時の困難さ
問5	一人一人の変容の把握の仕方
問6	一人一人の変容を把握する時の困難さ
問7	指導内容・方法の見直し時の困難さ
問8	自閉症児への指導に関する自由記述

(2) 調査結果

ア 特殊学級における自閉症児の在籍状況

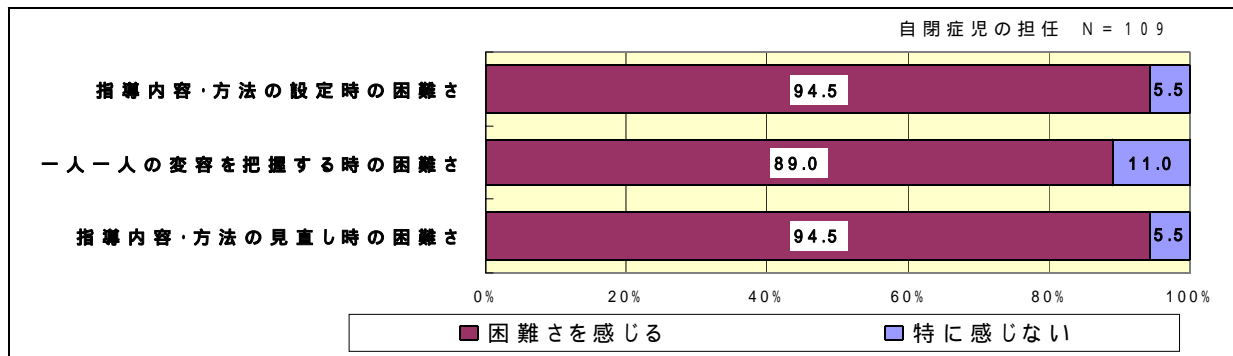
本調査における自閉症児の在籍の有無については、医学的に診断されている場合、もしくは、保護者や他機関等からの情報がある場合とし、担当者の判断だけによる場合は含めずに調査を行った。また、高機能自閉症及びアスペルガー障害（症候群）は自閉症に含めて回答を依頼した。その結果、県内の特殊学級（知的・情緒）に在籍する自閉症児の在籍状況は【表2】のようであることが分かった。

【表2】 県内の特殊学級における自閉症児の在籍数 ()内は学級数

	小学校		中学校		合計
	知的障害	情緒障害	知的障害	情緒障害	
自閉症児のみ1人在籍する学級	7 (7)	11 (11)	3 (3)	3 (3)	24 (24)
自閉症児のみ複数在籍する学級	4 (2)	23 (6)	0 (0)	4 (2)	31 (10)
他の障害種も在籍する学級	42 (37)	31 (15)	29 (19)	5 (4)	107 (75)
自閉症児の合計	53 (46)	65 (32)	32 (22)	12 (9)	162 (109)
特殊学級(知的・情緒)に在籍する児童生徒数	409 (146)	94 (35)	288 (106)	21 (11)	812 (298)

イ 自閉症児への指導における困難さの有無

【図3】には、指導内容・方法の設定・見直し、変容の把握の各過程で感じる指導上の困難さの有無についてまとめた。どの過程においても90%前後の担任が自閉症児への指導に何らかの困難さを感じていることが分かった。



【図3】 各過程における指導上の困難さの有無

ウ 指導内容・方法の設定と見直しに関する実態

「指導内容・方法の設定時の配慮・活用事項」を次頁【図4】に、「設定時の困難さ」を次頁【図5】に、「見直し時の困難さ」を次頁【図6】にまとめた。これらの比較から分かったことは、次の七点である。

<【図4】から分かったこと>

- ・「観察等による実態把握」「以前の学習状況」「保護者の要望・意見」等は、指導内容・方法の設定時に配慮している事項として高い順位にあった。このことから、指導内容・方法の設定に関しては、観察のみならず、多面的な情報に基づいた児童生徒理解を重視していることが分かった。

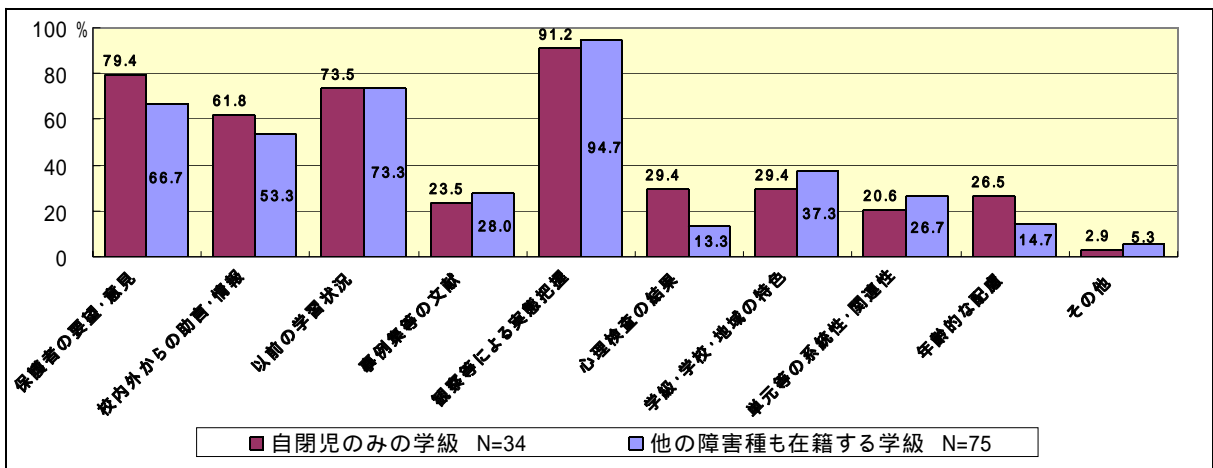
<【図4】【図5】【図6】の比較から分かったこと>

- ・「観察等による実態把握」「保護者の要望・意見」は、指導内容・方法の設定時に配慮している割合も高いが、同時に困難さを感じている割合も高いことが分かった。
- ・「単元等の系統性や関連性」は、設定時、見直し時ともに、最も高い困難さを示す事項であった。これは、自閉症児一人一人の発達や成長を重要視し、より総合的で計画性のある指導を求めていることを示すものであると考えた。

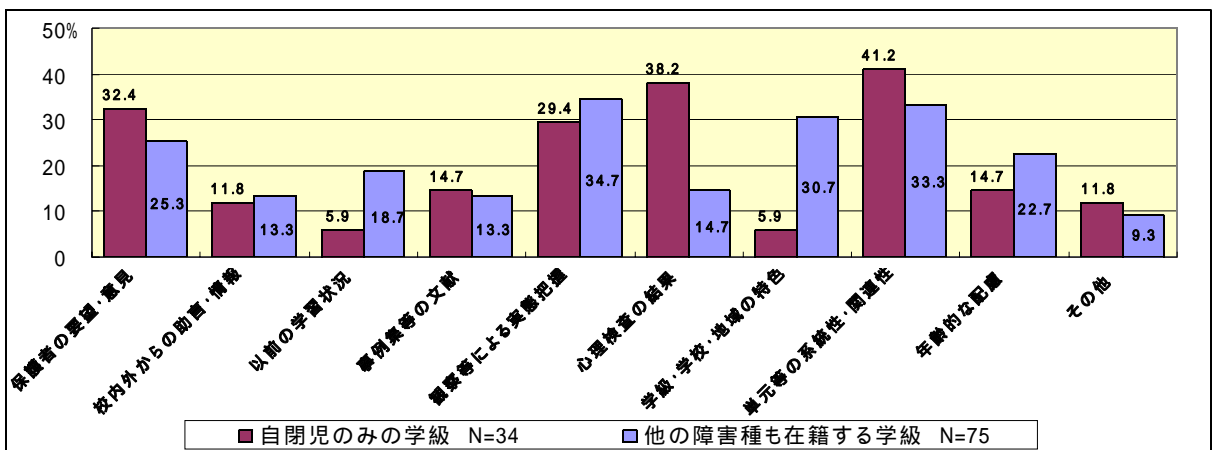
- ・「以前の学習状況」を生かす困難さが、設定時よりも見直し時に増すことから判断しても、指導には系統性や関連性が求められていることが分かった。
- ・「事例集等の文献」を参考にする方法については、実施の割合も困難さの割合も低く、あまり意識されていないと思われた。

<【図5】【図6】の比較から分かったこと>

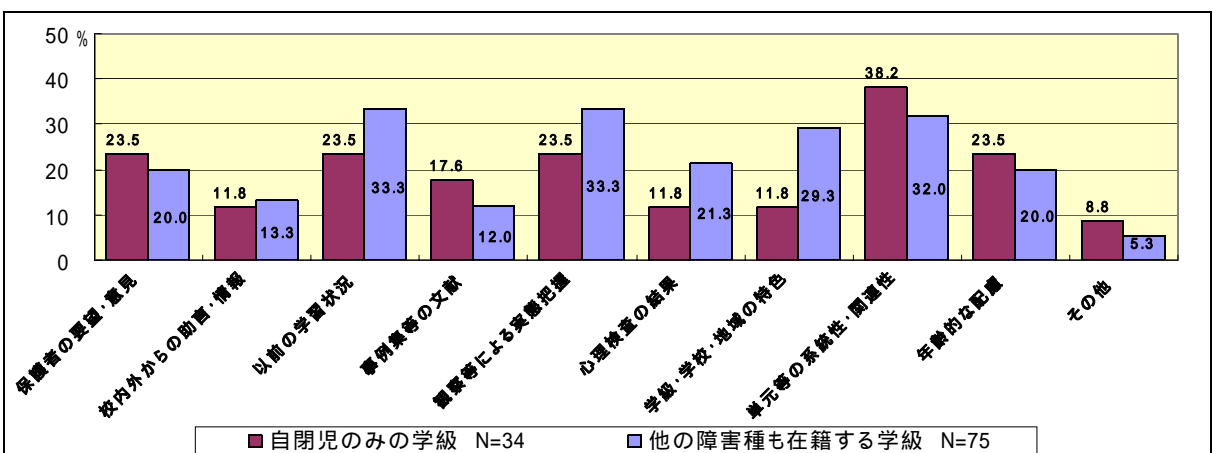
- ・自閉症児のみの学級では、設定時は「心理検査の結果」が高かったが、見直し時は「以前の学習状況」「学級・学校・地域の特色」「年齢的な配慮」が高くなっていった。
- ・他の障害種も在籍する学級では、「心理検査の結果」の生かし方の困難さは見直し時に増加し、「学級・学校・地域の特色」の生かし方の困難さは設定時から高いという特徴が見られた。



【図4】 指導内容・方法の設定時に配慮・活用している事項（複数回答）



【図5】 指導内容・方法の設定時の困難さ（複数回答）

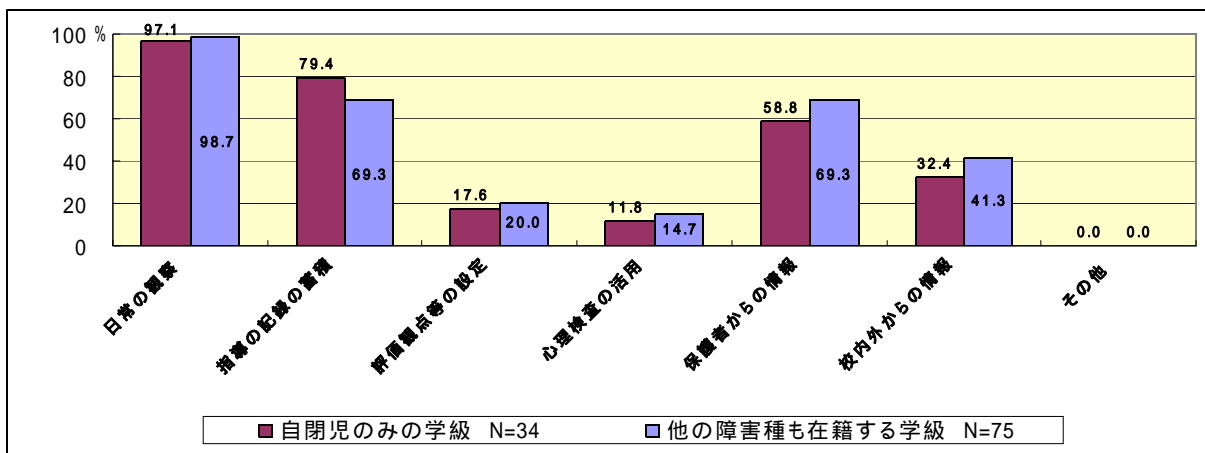


【図6】 指導内容・方法の見直し時の困難さ（複数回答）

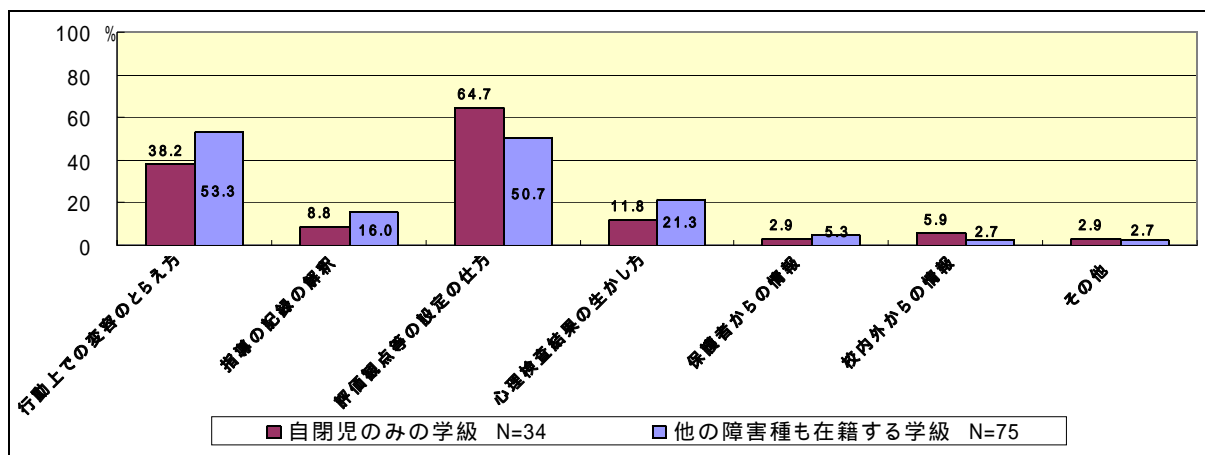
エ 一人一人の変容の把握に関する実態

一人一人の変容を把握する時の実施事項を【図7】に、その時に感じる困難さを【図8】にまとめた。これらの比較から分かったことは、次の四点である。

- ・一人一人の変容の把握は、多くの場合は「日常の観察」によって行っているが、同時に「行動上での変容のとらえ方」に困難さを感じていることが分かった。
- ・「評価観点等の設定」による変容の把握は、困難さを感じている割合が最も高く、そのために実施している割合が低いものと思われた。
- ・「指導の記録の蓄積」「保護者からの情報」「校内外からの情報」による変容の把握は、困難さも少なく取り入れやすい方法であると思われた。
- ・「心理検査の活用」は、実施の割合も困難さの割合も低いことから、変容の把握には必要性を感じていない場合が多いものと思われた。



【図7】 一人一人の変容を把握する時に実施している事項（複数回答）



【図8】 一人一人の変容を把握する時の困難さ（複数回答）

オ 「特殊学級における自閉症児への指導の在り方」に関する意見・感想

自由記述による意見・感想の内容から分かったことは、次の三点である。

- ・一人一人の認知特性や発達段階の把握と、その違いに対応した指導に関する困難さを感じていることが分かった。
- ・校種や学級種を問わず、他の障害種との特性の違いや、他の児童生徒とのかかわり方に関する困難さを感じていることが分かった。
- ・指導書やヒント集のような指導の手引きを望む声が多かった。

(3) 調査結果のまとめ

ア 一人一人の認知特性と発達段階の把握の仕方に関する困難さ

指導内容・方法の設定についての調査結果から、多くの担任が実態把握を重視して行っているものの、把握した結果の生かし方には困難さを感じていることが分かった。

また、一人一人の変容の把握についての調査結果から、「行動上での変容のとらえ方」と「評価観点等の設定の仕方」に困難さを示していることが分かった。このことは、自閉症の認知特性が他の障害種と異なることや個人差があること、発達段階が一人一人異なることなどが要因であると考えられ、認知特性と発達段階の把握に苦慮している現状がうかがえた。

以上のことから、一人一人の認知特性や発達段階の把握については、指導の各過程で重視されているが、実際の把握には様々な困難さを感じていることが明らかになった。

イ 一人一人の認知特性と発達段階に応じた指導内容・方法の見直し方に関する困難さ

指導内容・方法の見直しについての調査結果から、90%以上の担任が何らかの困難さを感じていることが分かった。設定時よりも困難さが増す事項は、「以前の学習状況」の生かし方であり、設定時から高い困難さを示している事項は、「単元等の系統性や関連性」への配慮と、「観察等による実態把握」の生かし方であった。このことは、指導内容・方法の見直しでは、自閉症児の発達や成長が重視されていることを示すものであり、自閉症児一人一人の認知特性と発達段階を考慮に入れた見直しが求められていると考えられた。

また、「学級・学校・地域の特色」を生かした見直し方の困難さは、他の障害種も在籍する学級において感じる場合が多いことから、他の障害種との特性の違いや、他の児童生徒とのかかわり方を考慮に入れた見直しが必要であることも明らかになった。

以上のことから、多くの担任が、一人一人の認知特性と発達段階に応じた指導内容・方法の見直しを重視しながらも、実際の指導では困難さを感じていることが明らかになった。

3 実態調査結果に基づく特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図るための基本構想

(1) 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図るための基本構想

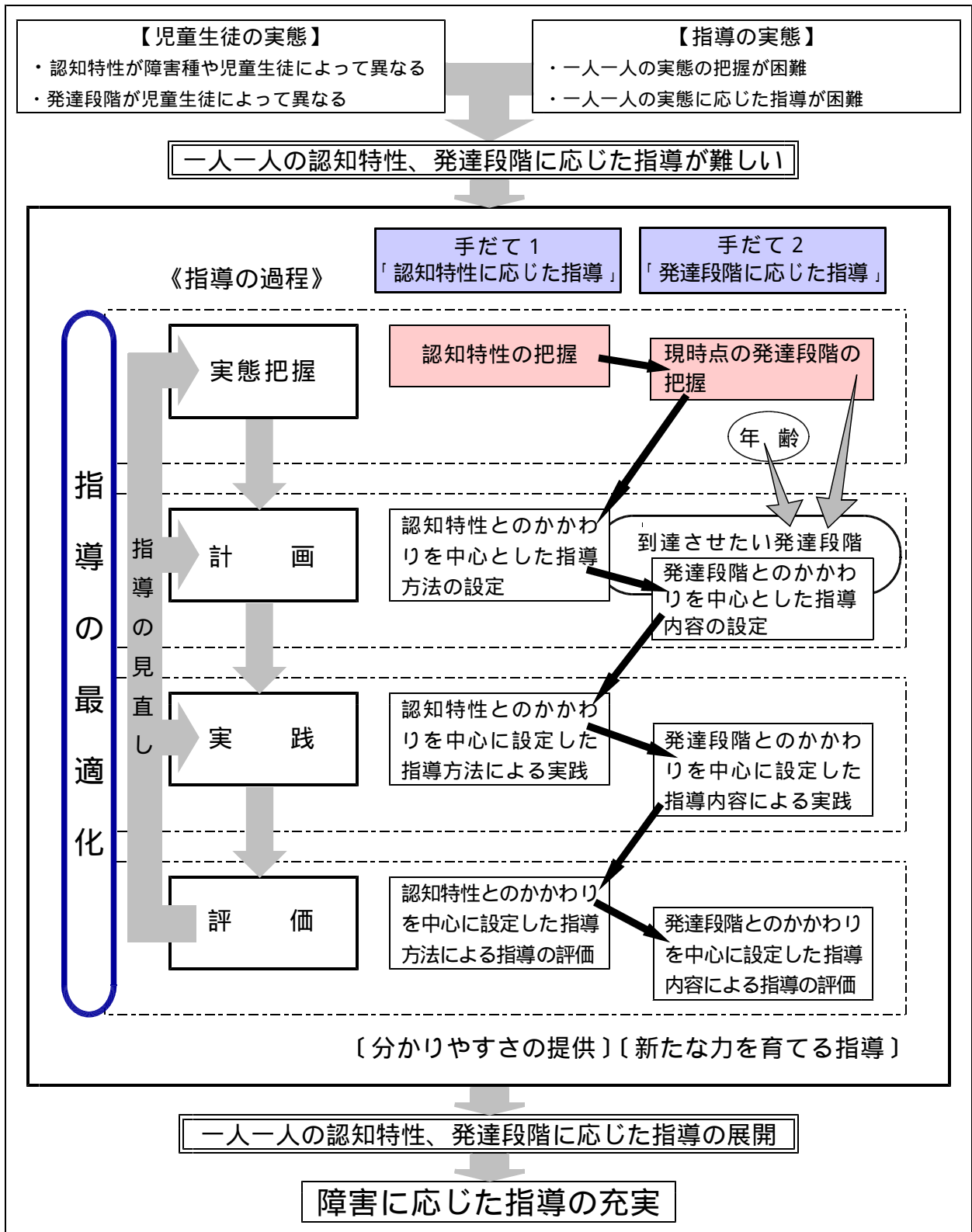
前述の実態調査結果から、特殊学級における自閉症児への指導においては、指導内容・方法の設定時や見直し時、一人一人の変容を把握する時など、様々な指導の過程において、「以前の学習状況の生かした方」、「観察等による実態把握に応じた見直し方」、「行動上での変容のとらえ方」などの課題を抱えている現状が明らかになった。

このことから、特殊学級における自閉症児への指導の最適化を図るためには、指導の各過程において最適化を図る必要があり、自閉症児の認知特性と発達段階に視点を当てた具体的な手だてを構築する必要があると考えた。

したがって、本研究の基本構想立案に当たっては、前述の特殊学級における自閉症児への指導の最適化に関する基本的な考え方に基づき、自閉症児への基本的な指導の過程を、実態把握、計画、実践、評価、の四つととらえ、主に指導方法を中心とした「認知特性に応じた指導の手だて」と、主に指導内容を中心とした「発達段階に応じた指導の手だて」を構築する必要があると考えた。

この二つの具体的な手だてに基づいて指導実践を行うことにより、特殊学級における自閉症児一人一人への指導の最適化が図られ、指導の充実に役立つであろうと考えた。

(2) 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図るための基本構想図
 基本構想を基に、特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図るための基本構想図を、【図9】のように作成した。



【図9】 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図るための基本構想図

4 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る手だて

(1) 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る手だての構築の考え方

前述の実態調査結果や指導の最適化を図るための基本構想の検討を基に、特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る手だての構築の考え方を次のようにおさえた。

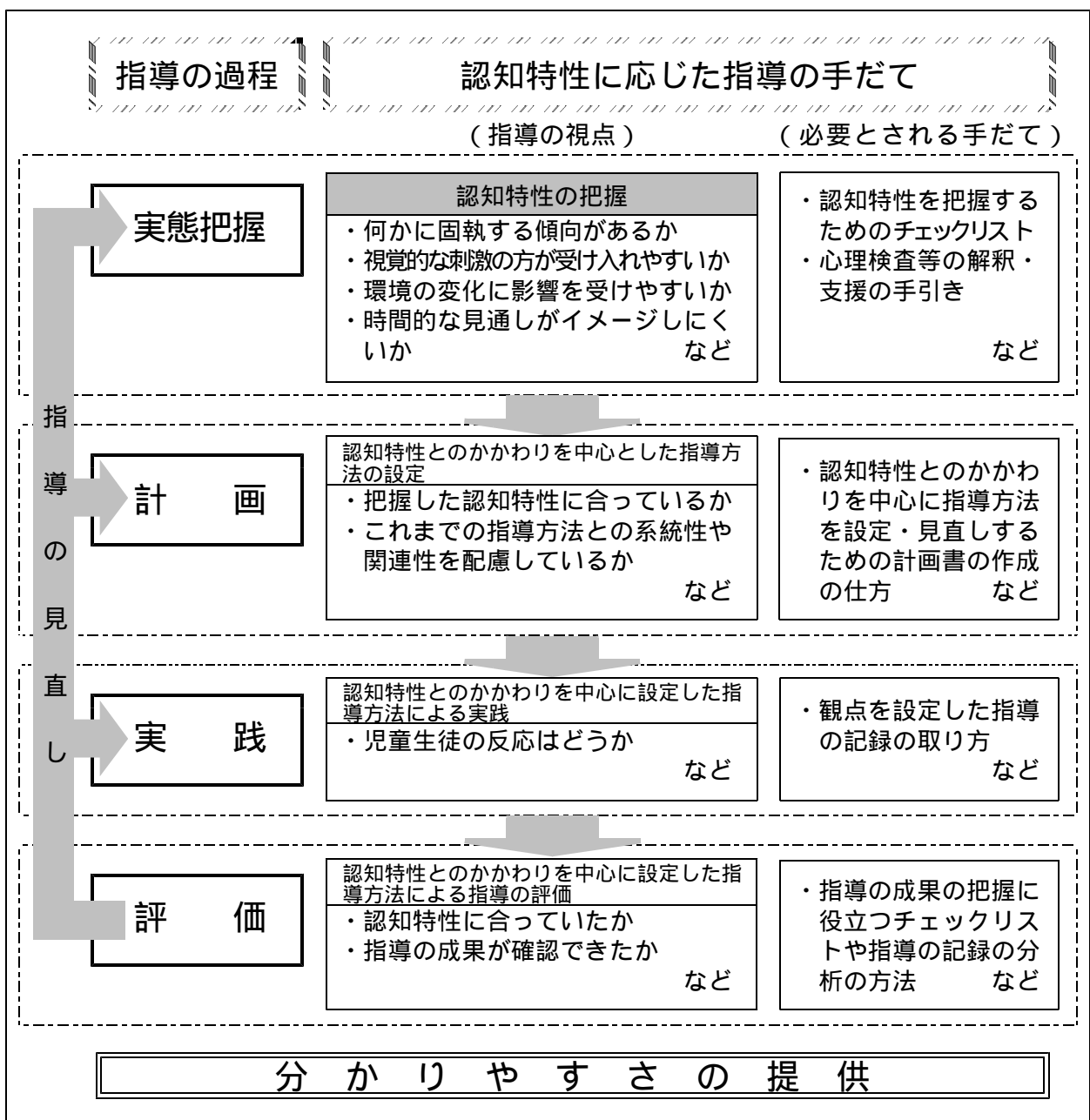
ア 指導の四つの過程ごとに、自閉症児の認知特性とのかかわりを中心に設定する指導方法による指導の手だてが具体的に示されている必要があること

イ 指導の四つの過程ごとに、自閉症児の発達段階とのかかわりを中心に設定する指導内容による指導の手だてが具体的に示されている必要があること

なお、これらの手だての構築においては、認知特性と発達段階にかかわる実態把握の過程を重視する必要がある、これらを把握する際のそれぞれの観点を十分に検討することが大事であると考えた。

(2) 手だて1「認知特性に応じた指導」の方向性

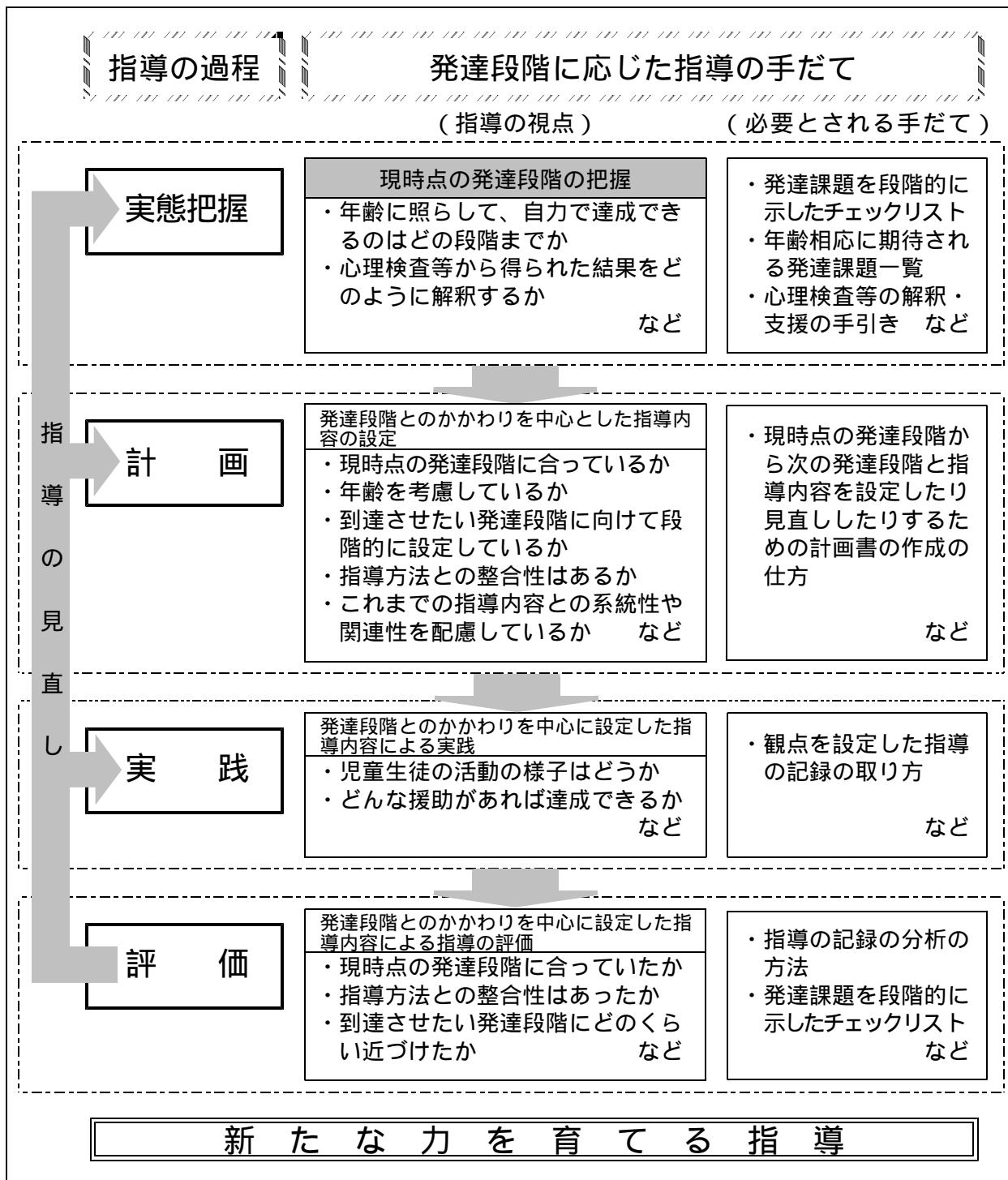
手だての構築の考え方のアに基づく手だてを手だて1「認知特性に応じた指導」として、その方向性を【図10】に示した。



【図10】 手だて1「認知特性に応じた指導」の方向性

(3) 手だて2「発達段階に応じた指導」の方向性

手だての構築の考え方のイに基づく手だてを手だて2「発達段階に応じた指導」として、その方向性を【図11】に示した。



【図11】 手だて2「発達段階に応じた指導」の方向性

研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化に関する基本的な考え方
 自閉症児への指導の充実が求められている今日的動向を踏まえ、自閉症児一人一人の認知特性と発

達段階に応じた指導を重要なポイントとし、特殊学級における自閉症児への指導の最適化に関する基本的な考え方をまとめることができた。すなわち、実態把握、計画、実践、評価、の四つの指導の過程において、主に指導方法の設定にかかわる自閉症の認知特性と、主に指導内容の設定にかかわる一人一人の発達段階に視点を当てて、適切かつ計画的に見直しを図ることが、指導全体の最適化につながるという考え方ができた。

(2) 特殊学級における自閉症児への指導に関する実態調査とその分析・考察

ア 一人一人の認知特性と発達段階の把握の仕方

特殊学級担任は、指導内容・方法の設定のために実態把握を重視しているが、把握したことを指導に生かすことについては困難さを感じている場合が多かった。また、自閉症児の認知特性に起因して、指導による変容がとらえにくいことや、一人一人によって把握の仕方が異なる難しさを感じていることも明らかになった。

イ 一人一人の認知特性と発達段階に応じた指導内容・方法の見直し方

指導内容・方法の見直しの際に困難さを感じている担任は多く、実態把握の生かし方、指導の系統性や関連性を考えた見直し方、他の児童生徒とのかかわらせ方に困難さを感じている現状が確かめられた。

(3) 特殊学級における自閉症児の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図るための基本構想の立案と手だての構築の方向性

特殊学級における自閉症児への指導の最適化を図るための基本構想立案に当たっては、主に指導方法を中心とした「認知特性に応じた指導の手だて」と、主に指導内容を中心とした「発達段階に応じた指導の手だて」を構築する必要があると考え、それぞれについて、具体的な手だての方向性を示すことができた。

2 今後の課題

次年度は、自閉症児一人一人の認知特性と発達段階に応じた指導の最適化を図る手だてを具体化し、授業の実践をとおして、実証的に特殊学級における自閉症児への指導の在り方を明らかにしていく必要がある。

【参考文献等】

- ・太田昌孝・永井洋子、「認知発達治療の実践マニュアル」, 日本文化科学社, 1992
- ・津田望・東敦子、「認知・言語促進プログラム」, コレール社, 1998
- ・21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議, 「21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～(最終報告)」, 2001
- ・佐々木正美, 「自閉症のTEACCH実践」, 岩崎学術出版社, 2002
- ・小出進・千葉大学教育学部附属養護学校, 「生活中心教育の原理」, K & H, 2002
- ・全国知的障害養護学校長会, 「自閉症児の教育と支援」, 東洋館出版社, 2003
- ・滝川一廣・小林隆児・杉山登志郎・青木省三, 「そだちの科学1」, 日本評論社, 2003
- ・全日本特別支援教育研究連盟, 「発達の遅れと教育10月号 554」, 日本文化科学社, 2003
- ・特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議, 「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」, 2003
- ・上野一彦・緒方明子・柘植雅義・松村茂治, 「LD & ADHD 8」, 明治図書, 2004